2024（令和６）年５月18日（土曜日）に開催された外国籍県民かながわ会議（第12期・第９回）の議事録は次のとおり。

１　開会

（事務局）

・　会議のルール、録音、傍聴者、欠席者及び配付資料について説明した。

２　全体会議

（柳　晴実 委員長）

・　オープン会議では、いろいろな方からいろいろな意見が出たので、それを参考にしながら私たちの提言の完成度を上げていきたい。

・　本日は、最初に全体会議、その次に部会別協議を行い、最後にもう１度全体会議で話をしたい。

・　最初の全体会議では、オープン会議で出た意見の内容について、改めて皆で共有したい。不明点や補足する点があれば、お知らせいただきたい。

・　部会別協議では、オープン会議の意見をどのように反映するか、提言素案に書かれた内容で既に実現している部分があるという話も出ていたので、そこをどう変えていくのか、話し合ってもらえればと思う。

・　今後、再び懇話会委員に話を聞く機会も設けられる。提言をまとめるうえで、この人に話を聞きたいという希望があれば、部会で出してほしい。

・　最後の全体会議では、各部会で話し合ったことを共有する。また、「あーすフェスタかながわ 2024」についてもお話ししたい。

・　まず、オープン会議の意見を皆で共有する。資料２を御覧いただきたい。

・　柳委員長が、資料２の記載内容を読み上げた。

＜情報部会に関する委員からの確認・補足等＞

・　特になし。

＜次世代・教育部会に関する委員からの確認・補足等＞

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　先月、横浜の高校で行政書士会が在留資格や奨学金に関する親子向けの相談会を実施した。私は通訳として呼ばれたが、親は一人も来なかった。

・　在留資格や奨学金の話は、高校一年の子どもには難しい。奨学金を検討するのはまだ早いと考えていて、在留資格については親に任せている。
・　子どもは日本語ができるので、子どもから親に伝えることはできるが、親に直接話を聞かせることができないと、とても難しいと思う。
・　南米の子どもの親は誰も来ていなかったが、他の国の子は地域の学習支援の先生が来て通訳をしていたので、何とかしなければいけないと思った。

(柳　晴実 委員長)
・　親がなかなか参加できない理由は何か。

(鈴木 クリスチーナ 委員)
・　平日で仕事が休めないという理由が一番。相談会があっても、親は言葉が分からないから、子どもからあとで聞けばよいという感覚はすごく感じた。

(柳　晴実 委員長)
・　子どもが聞いたことを親にきちんと伝えるのは、難しいところがある。

(鈴木 クリスチーナ 委員)
・　将来に備えた準備が必要なのに、まだ早いからと、参加しない人が多い。

(岩松 佐由美 副委員長)
・　在留資格の変更などには時間がかかるので、前もって準備が必要である。

(鈴木 クリスチーナ 委員)
・　そのとおり。そこから慌てることになるので、こういう相談会に親が参加できる仕組みが必要である。

(柳　晴実 委員長)
・　オープン会議で、学校だけでなく、横の連携も含めてという話があったと思うが、どういうイメージで横の連携と言っていたのか分かる方はいるか。

(韓 昌熹 委員)
・　必要な視点だと思うが、私たちの発表内容と少し離れた意見だと感じた。同様の活動をしているクラブとの連携や交流はありうるが、自主的なクラブ活動なので、何らかの支援をしなければいけないわけではないと思う。
・　発表の中で連携という言葉を使ったかもしれないが、言葉の使い方が悪かった。教育機関や支援機関との連携などを想定しているわけではない。

（俞 大達 副委員長）

・　行政書士などの専門家、大学教授、ＮＰＯ等とつながりを作った方がよいと言われた記憶がある。

・　果たしてそこまで横のつながりを作る必要があるのか、あるいはそういうつながりを作って対応するのか、その場では議論に至らなかった。

（韓 昌熹 委員）

・　我々が想定する連携は、同様の活動をしている他の学校や学生同士の連携をどうするかであり、このときは連携という言葉だけで議論が他のところに行ってしまったのではないかと思う。

（柳 晴実 委員長）

・　こちらの想定とは違う視点からの連携方法もあるし、連携してほしいという御意見だと思うので、どう対応するか、部会の中で相談してほしい。

・　子どもは学校にも行くし、地域で支援団体にお世話になっていたりもする。そういうところで支援している側の方から、いただいた御意見だと思う。

＜社会福祉部会に関する委員からの確認・補足等＞

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　在留資格や言葉など様々な問題がある。外国人高齢者をワンストップでサポートする仕組みを作り、介護士、入管ＯＢや栄養士など、いろいろな専門分野の方が入って対応できるようにしないと、間に合わないと思う。

（柳 晴実 委員長）

・　ここに電話して相談すれば糸口が見える、という窓口があるとよい。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　介護施設を助けるだけでなく、高齢者本人も助けなくてはいけない。

（柳 晴実 委員長）

・　提言の中で具体的な内容まで踏み込んでいくか、ざっくりとしたところを載せて細かく詰めていくかなど、いろいろな方法があると思うので、その点も含めて部会の中で相談したい。

・　以上で、オープン会議で出た意見の共有は終了する。意見を踏まえて、提言をこれからどう発展させていくか、各部会で話をしていただきたい。

３　部会別協議

＜情報部会＞

（ロボ ナシメント 部会長）

・　「神奈川県の HP の管理改善」に関する内容について、オープン会議では結構強い意見があった。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　当時情報が手に入らなかったことは今となってはどうしようもないので、情報について、提言の中でどう書いていくのかだと思う。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　給付に関する情報は、重要である。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　日本人でも入手しにくい。提言の中で、例として載せた方がよいか。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　重要な制度について、外国籍県民に伝わらないと、困ることが出てくる。外国人向けのページにこのような情報を載せてほしいと記載するか。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　記載した方がよいと思う。

（祁 静 委員）

・　例えば、新型コロナウイルス感染症が流行したらワクチンの予約に関する情報を掲載するなど、外国人が今一番必要な情報を発信してほしい。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　30代、40代の方は、神奈川県のホームページを自ら閲覧すると思うが、自分の世代はわざわざ見に行かない。ＳＮＳで情報を得ることが多い。

・　一般の方がＳＮＳに載せている情報が 100%正しいとは思っていないが、県などがＳＮＳで情報を発信すれば、それを拡散することもできる。

（祁 静 委員）

・　年齢層によって使用しているＳＮＳが異なる。県が全部に対応することは難しいのではないか。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　例えば、「永住権や在留資格に関する質問は、こちらに連絡すれば分かります」といったことをＳＮＳで発信したら、伝わりやすいのではないか。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　神奈川県公式のＸもあるようだ。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　そこに直接情報を載せられなくても、ホームページに誘導できないか。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　普段はどのＳＮＳを使っているか。

（祁 静 委員）

・　WeChat を使用している。今は子どものために LINE を入れているが、中国では LINE や Instagram は使用できない。

・　年齢により、Facebook、X、Instagram、若者は Tiktok といった違いがある。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　全ての人に情報を伝えるのは難しいと思う。

（祁 静 委員）

・　給付金申請などの場合、期限を過ぎると申請できなくなる。いかにスピーディに情報を伝えるかが大事である。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　県の公式ＳＮＳには、どのようなものがあるか。

（事務局）

・　知事室が運営するＳＮＳ（X、Facebook、Instagram、YouTube）のほか、分野毎に各部署が必要に応じてＳＮＳアカウントを作成し、運営している。

（祁 静 委員）

・　普段、皆さんが使用しているＳＮＳでは、大体県は情報発信している。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　ＳＮＳに載せても、ホームページに行かないと多言語で見られないことが課題である。記事の下に多言語のリンクがあれば、外国人にも分かりやすい。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　ＳＮＳで多言語の情報発信をすることはできないか。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　非常に労力がかかるので、難しいと思う。

（祁 静 委員）

・　スマートフォンで言語の設定をすると、全ての内容を自動で母国語に翻訳してくれるものがある。正確な翻訳ではないが、何となく内容は理解できる。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　そういった機能の使用や、多言語のリンクについて提言に盛り込むか。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　先ほどＳＮＳの記事について話していたが、どのように実現するのか。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　投稿の下に「Language」のリンクがあり、翻訳したページに飛べるとよい。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　投稿によって、「Language」のリンクの有無を決めるということか。

（祁 静 委員）

・　そのとおり。「台風が来るから準備をしてください」といった重要な情報は、かながわ国際交流財団が翻訳してウェブサイトで発信している。

・　県のホームページを多言語化するのではなく、県内で活動している団体の多言語のＳＮＳやホームページに誘導できるとよい。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　少し付け加えるだけで、伝わりやすくなるのではないか。

（祁 静 委員）

・　県のホームページは一つの窓口としてあって、いろいろな情報につなぐ役割を担う形でもよいと思う。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　ホームページにはいろいろな情報が載っているが、そこまでたどり着かない人は見ない。ＳＮＳの投稿で、多言語で見られることをお知らせする。

（祁 静 委員）

・　私たちは、安全で正確な情報を知りたい。インターネットに掲載されている情報は、どちらが正確でどちらが信頼できるか迷うものがある。県が紹介している情報であれば、安心できる。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　言っていることは分かるが、どのように提言に反映させるのか。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　今話し合った内容を、提言の中にもう少し分かりやすく書く。

・　オープン会議の意見で挙がっているように、パソコンで見る場合と携帯で見る場合も違うので、そういった内容も盛り込むとよいかもしれない。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　県がどのように情報を選び、ホームページに掲載し、管理運営しているかは我々には分からないため、細かいことまでは提言しなくてよいと思う。

・　我々は、外国籍県民がどのような情報を求めているかは提示できる。外国人が安心して生活するためにはこのような情報が必要だ、といったことをいくつか挙げれば、県側でホームページを改善できると思う。

・　様々な言語を話す方がいて、やさしい日本語でも伝わらない外国人もいる。

・　まず、横浜市のホームページのような多言語対応をしてもらえれば助かる。そのうえで、どのようにページに情報を掲載するか考えないといけない。

・　日本語と同じ情報を掲載するか、もっとシンプルにまとめるか、考える必要がある。そういった内容を提言すれば、県も対応を考えられると思う。

（祁 静 委員）

・　県のトップページに分かりやすく外国人向けの案内があるとよい。日本語で書いてあると分からないため、子育てなら赤ちゃんのマーク、病院なら病院の建物のマークといったように、イラストで表現してはどうか。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　現状、県のトップページに外国人向けの情報は一切ない。

（祁 静 委員）

・　トップページのバナー部分に、外国人向けのコンテンツを追加してほしい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 「Translate」と書いてあるが、英語を理解できないと意味が分からない。
- 横浜市のページには、「Language」ボタンがある。

（祁 静 委員）

- 日本語が分からない人は、絵や写真を見て、自分向けの情報だと思えばそのボタンを押す。トップページに、外国人向けのボタンを作ってほしい。

（岩松 佐由美 副委員長）

- 県のホームページには「Language」ボタンがないため、加えた方がよい。

（祁 静 委員）

- 県のページは、Google で自動翻訳されたページが表示されるだけである。

（ロボ ナシメント 部会長）

- １か所だけではなく、複数設置する必要がある。メニューにも追加が必要。
- 外国人の割合に沿って、英語・中国語・韓国語など、複数言語でボタンがあるとさらによい。

（祁 静 委員）

- 「目的から探す」の部分にも、ボタンを追加してほしい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 重要な情報が多言語で載っていないことが問題である。県が、日本人にとって大事な情報は外国籍県民にとっても重要だと認識するのが、最初の段階だと思う。そう判断していれば、日本人向けも外国人向けも同様に載せないといけないという話になる。
- 今は県がそのように判断していないため、外国人向けになっていない。

（祁 静 委員）

- 多言語で案内しているページにつなぐ部分が重要である。情報の整理は、私たちが考えるべきところではない。

（ロボ ナシメント 部会長）

- そのとおり。「Language」でも「外国籍県民へ」でもよいが、多言語で書かないと伝わらない。

（祁 静 委員）

- 「Language」だけでは伝わりにくいので、イメージを図示した方がよい。
- 例えば、外国人が話しているイラストなどを分かりやすく載せてほしい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 写真があれば一番よい。言葉で説明する必要がなくなる。

（祁 静 委員）

- どのように表示するのがよいか。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 例えば、国旗を使えば言葉を使わなくてよい。メニューにも同じような説明を入れないといけない。
- 横浜市のページが見本になる。言語を選択すると、税金や子育てなど、分野別に情報が表示される。このような形にすればとても分かりやすい。
- 全ての外国語には対応できないと思うが、いくつかの言語で掲載すれば、国際的な対応ができているページになる。

（岩松 佐由美 副委員長）

- コンテンツを追加する際に、大事な情報も載せられるような形にしていくことが必要である。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 大事な情報をどのように決めるかが課題になる。県側で考えないといけない。情報は幅広く、大事な情報は状況によっても変わる。

（祁 静 委員）

- 自分からページを見に行くだけでなく、LINE のように、自動で配信される情報もある。そういった内容も盛り込みたい。

（岩松 佐由美 副委員長）

- 毎日は不要だが、1週間に1回程度情報を送ってもらえれば、それを見て大事な情報を探すことができる。

（祁 静 委員）

- 例えばLINEの公式アカウントに登録すると、新たに始まる税金の制度とか、大雨の際に気を付けなければいけないことなどが配信されるとよい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 外国籍県民に配慮した情報発信を行うこと、携帯でも多言語の情報がどこにあるか分かるようにすること、そういった内容を提言に追加する。
- 次に、小学生、中学生向けの日本語のオンライン教室に関する提言について話したい。オープン会議の意見で、反映すべきものはあるか。

（岩松 佐由美 副委員長）

- 教科指導に対応できない先生が多いと思うが、研修を受けて専門的な日本語の知識を身に付けた人に教えてもらった方が、子どもたちも混乱しないと思う。この部分をうまくまとめて、提言に付け加えたい。
- 時間帯について、小学生はよいとして、中学生は部活がある。小学生は早い時間帯、中学生はもう少し遅い時間帯の方が見られるかもしれない。
- Wi-Fi の問題は考えていなかったが、自宅で使えない場合、公共施設に行くしかないのか。

（祁 静 委員）

- 公共施設にはフリーWi-Fi がある。コロナのときは、学校に申請すればポケットWi-Fiを無料で貸してくれる自治体もあった。日本語を勉強するという目的であれば、教育委員会等から無料のWi-Fiを借りられるかもしれない。

（岩松 佐由美 副委員長）

- そういった点も追記したいと思う。

（祁 静 委員）

- 日本語が分かるようになれば、学校の先生の教科指導も自然に理解できる。

（祁 静 委員）

- 大和市では、教育用Wi-Fi ルーターの貸出しをしている。市によって違いはあると思うが、日本語の勉強でも使用できるのではないか。

（ロボ ナシメント 部会長）

- ホームページの話に戻るが、横浜市のホームページは、分野別になっているが、最新の情報を提供することを目的とした構成にはなっていない。

（祁 静 委員）

- 情報を自分で探さないといけない。情報が自動で届く仕組みが必要。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 多言語のページには、最新の情報が載っていない。多言語のページの情報管理の方法が変わらないと、適切な情報が提供されないと思う。
- 横浜市の多言語のページにも、最新の情報は全然ない。載っているのは、ゴミの出し方、税金、教育、保険など、様々な制度に関する情報である。
- 日本人向けと同じレベルで外国人向けの情報を提供しようという考慮がないと、給付金のような大切な情報が、外国籍県民に届かない。
- 県のホームページでは、イベント情報などが毎日更新されている。全ての情報を外国人向けに翻訳して提供するためには、人手が必要になる。

（祁 静 委員）

- そこまで考えると、膨大な量になる。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 今はできなくても、それが理想的である。今よりよい状態にすることはできると思う。今の状態では足りない。

（祁 静 委員）

- 防災・緊急情報も命に係わる大切な情報なので、少なくとも日本語とやさしい日本語での情報提供は行ってほしい。
- 一度に改善するのは難しいため、徐々に改善できればよい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- ＳＮＳで多言語で発信するのは難しいと言っていたが、なぜ難しいのか。

（岩松 佐由美 副委員長）

- 翻訳が必要だからである。大事な情報はすぐ発信しなければいけない。他のページに多言語の情報が載っているなら、そこを紹介した方が早い。

（祁 静 委員）

- 迅速に対応するためには、翻訳者を確保していないと対応できない。まずは日本語とやさしい日本語で発信して、後から補足すればよいと思う。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 日本語で発信する前に、翻訳の準備をしたうえで順番に発信する方法なら、難しくないのではないか。県には通訳がいるのではないか。

（事務局）

・　英語の通訳はいる。

（祁 静 委員）

・　防災・緊急情報など命に係わることは、事前に定型文を用意できる。定型文を作っておけば、貼り付けるだけですぐに発信できる。

・　まずは日本語とやさしい日本語で発信した後、他の言語はできあがり次第追加するといった対応もできると思う。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　多言語で発信する場合、投稿間隔を短くしないと、閲覧者が心配する。

・　日本語で投稿する前に、各言語に翻訳したうえで、準備ができ次第、順番に発信するのがプロフェッショナルな方法だと思う。

（祁 静 委員）

・　県がそこまで対応できるかどうか。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　できるかできないかではなく、するかしないかである。ただ、週末などは通訳の方がおらず、対応が難しくなる可能性もあるとは思う。

＜次世代・教育部会＞

（肖 欣怡 部会長）

・　オープン会議でいただいた意見を踏まえて、提言の内容をどう変更するか話し合いたい。

（韓 昌熹 委員）

・　提言の趣旨を理解したうえでの意見ならよいが、趣旨を理解してくれているか疑問がある。我々の提言は、外国人の生活者のための支援ではない。

・　外国人を直接支援するような提言ではないのに、いただいた意見の内容は、支援する側の「上から目線」の話になっている気がする。

・　外国人の生徒によるクラブ活動というイメージを持っているのではないかと感じた。今後はそういう活動もあり得ると思うが、日本人が外国のことについて、国際理解を深めていくという提言であるという基本的な方向性を、分かりやすく表現しなければといけないと思う。

・　多文化共生は社会をどうするかという話。我々が提言したい国際理解は、日本人の学生が自国以外をどう理解するかの話で、もう少し範囲が狭い。
・　まず自分がいて、自分以外の存在を理解する、その後で自分を含めた社会をどうするかという段階がある話なので、いきなり飛躍させるのは難しい。
・　ただ、県や国では多文化共生を推進しているという政策的な流れもあるため、どう対応するかは皆さんと意見交換する必要があると思った。
・　支援する立場からの意見が多かったが、提言を取りまとめるに当たっては、支援ではないということをどう分かりやすく伝えていくかが重要である。
・　オープン会議当日も、そういう意図ではないと回答したはずだが、外国人に対して何をどう支援するかという話になった。他の委員はどう思うか。

（レ ダンコア 委員）
・　在留資格の話が気になった。クラブの活動内容の一つとしてであれば、考えられると思う。
・　オープン会議当日にいただいた様々な意見をカテゴリ分けしてまとめると、今後提言をまとめるときの参考になると思う。

（蒋 香梅 委員）
・　参加者の意見は、私たちの提言の趣旨と少しずれたところが多い。在留資格の問題や、日本人に受入れのモチベーションがないなど、そのまま参考にして提言を修正すると、大変なことになると思う。

（韓 昌熹 委員）
・　全てを受け入れる必要はないと思う。「高等学校における国際理解クラブ活動」という言葉を見て、「多文化共生」という言葉に変えた方がよいと、一方的に思考が転換している。
・　提言の目的は、国際理解を進めることなのに、それが伝わっていない。

（蒋 香梅 委員）
・　参加者がそこまで十分に理解できていないかもしれない。

（韓 昌熹 委員）
・　我々も多文化共生社会を目指しているが、まずは国際理解、自分以外のことを理解しようという意図であることを、どう伝えるかが大事だと思う。
・　今後、外部からの意見を聞く機会はあるか。

（事務局）

・　懇話会との合同会議などで、意見を聞く機会はあると思う。

（韓 昌熹 委員）

・　そういう場でいただく意見がぶれないような提言にする必要がある。特に在留資格の件について、我々はそういった話はしていないと思う。

（兪 大達 副委員長）

・　支援側の方にこういった話をすると、必ず在留資格の話が出てくる。私は県の行政書士会で国際部の業務を担っており、あいにく都合が悪くて参加できなかったが、相談会における対応を頼まれたことがある。

・　主体は生徒であり、生徒自身が自分の在留資格について何を考えるのか、生徒から親に意思を伝えるのが大事なのに、結局親は来なかった。単純に仕事の都合というような一言で片付けられない理由があると思う。

・　我々の提言に在留資格のことを反映する必要は、たぶんないと思う。

（韓 昌熹 委員）

・　私たちが検討している提言案のテーマが学校だからと言って、学校で生じている全ての課題を解決するのは難しいし、その必要性も感じていない。

・　様々な課題の中で、我々はここに焦点を当てたということを明記しないと、なぜこの課題は検討していないのかという意見が来る可能性もある。

（兪 大達 副委員長）

・　背景に「横のつながりを作る必要がある」と書いてある。必要性が出てくれば専門家を呼ぶことも否定しないが、その必要性があるかは疑問である。

（肖 欣怡 部会長）

・　「必要があれば横のつながりを作る」という意味であって、そのために何かしなければいけないわけではない。

（蒋 香梅 委員）

・　もう少し書き方を変えてはどうか。

（肖 欣怡 部会長）

・　「必要があれば、国際理解を促進するための手段として横のつながりを使うことを考えている」という程度の表現であればよいかもしれない。

・　私の職場でも似たような企画をするとき、異文化や国際理解という言葉より、政策的な理由で多文化共生という言葉を使用するように勧められる。
・　おそらく、日本人と外国人が対等であることを強調したいからだと思う。
・　我々も多文化共生社会を目指しているので、その言葉自体は入れた方がよいが、なぜ敢えて国際理解にしたのか、説明することが大切だと思う。

（レ ダンコア 委員）
・　タイトルの下に、なぜ国際理解を進めるのか、国際理解と多文化共生がどのようにつながるのか、まずは国際理解から入って人々の認識が段階的に進んでいくという我々の考えを追記すると、読む人も分かりやすいと思う。

（韓 昌熹 委員）
・　地域社会を理解する、それを超えて日本社会を理解する。たぶん中学生、高校生にとっては自分の町内が地域社会の範囲。社会は、横浜なら横浜、県なら県の範囲にもあるが、それでは日本全体を理解しているとは言えない。自分が認識し理解する社会を広げていかないといけない。
・　また、あの国は好きではないがあの人は好きということもある。国や人ではなく、地域や文化が好きということもある。
・　我々はこの提言について、高校生の個人とどこをつなげたいのか、明確に示さないといけない。
・　多国間の関係を理解することがグローバル社会の理解ということになるが、そこまで目指すわけではない。他の地域の高校と一緒に交流会をやったり、インターナショナルスクールを訪問したり、他国の生徒とつながる取組はたくさんあると思う。それは学生と学生をつなげる取組だが、そういうものではないということを明確にしないと、受け止める側に誤解を与える気がする。

（レ ダンコア 委員）
・　同意する。絵やグラフを入れるなどの工夫をしたり、我々の考えについては短い文章ではなく、具体的に書いた方がよいと思う。

（肖 欣怡 部会長）
・　我々の提言の内容が、既に実施済みだと理解される可能性もあると思う。例えばある団体のこういう活動と似ているのに、なぜこの提言にはそういった内容が入っていないのか、という質問が来ることも想定される。
・　提言の趣旨、目的、実施方法など、もう少し具体的に書いた方がよい。

（韓 昌熹 委員）

- 国際理解という言葉の定義を我々の中で明確にしておかないといけない。高校の中で海外とつながりを作るような活動は他にもあると思うが、そういった活動とは違う部分を、整理して明示する必要がある。

（肖 欣怡 部会長）

- 大学でも国際理解の授業があると思うので、参考になるかもしれない。

（韓 昌熹 委員）

- 国際理解を担当している先生は、海外の大学で学位を取得した人が多いが、国際理解学の専門家ではないし、そもそもあまりそういう学問はない。
- 例えばイギリスに留学した人なら、留学先の大学周辺の社会や、交流した他の国の研究者との関係で気づいたことを国際理解として教えている。
- 本当の国際理解とは何か。200以上もある国の全てを理解するのは難しい。異文化に接したときにどういう態度を取るべきか、気づけたらよい。
- 一般的に人間は、自分が持っているものと比較して、他のことを理解する。日本のラーメンはこうだが、中国のラーメンはここが違うなど、比較の話。比較で教えられるのであればそうやって教えたい。

（蒋 香梅 委員）

- 川崎市の小中学校では国際理解教育が進んでいる。内容は文化紹介がメインで、例えば日本と韓国で似ている部分や違う部分を比べて、違う部分があるのは当然なので、多文化共生を目指そうといった感じで行っている。

（韓 昌熹 委員）

- 日本語学校で、先生が日本の入試について説明したとき、中国人の生徒に中国の学校について質問した。その生徒は、大学入試はこんな感じで、朝何時に学校に来て夜は何時まで勉強する、中国はこんな国だと説明した。
- しかし、周りにいた他の中国人が私のところは違うと言った。中国は非常に大きいため、省により教育政策が異なる。私はそのときに、中国でも社会としては一つではない、いろいろな文化があると気づいた。
- 例えば日本の中学校のあるクラスに中国人の子がいたとして、その子が上海出身であれば、このクラスの日本人は、上海のことしか分からない。それは正しい中国の理解ではない。四川省の子であれば、中国人は全員辛いものが大好きだと思うかもしれない。

（蒋　香梅 委員）

・　四川省の人が全員辛いものを好きなわけでもない。中国人でも餃子を作れない人がいる。

（韓 昌熹 委員）

・　正しい理解とは言えない。そういう多様性も理解できる活動になるとよい。

（肖　欣怡 部会長）

・　このようにまとめてはどうか。高校生に向けて、知らない国の多様な文化に対してどう向き合うかを啓発するため、国際理解とした。特定の国のことを知るのではなく、知らない国の多様な文化の存在自体を知ってもらうきっかけとしての普及啓発教育である。

（韓 昌熹 委員）

・　自ら取り組むものなので教育ではなく、我々が啓発するわけでもない。啓発という言葉を使うのであれば、学生主導で学生たちを啓発するといった感じになると思う。

・　自分が分からない社会についてどういう態度で向き合うかということは、教育ではない。現状の多文化教育や国際理解教育は、事例紹介のような感じで、先生が知っている外国人を連れてきて話して終わりとなっている。我々の問題意識として、そういう教育だけでは物足りないというところから始めたという説明が必要である。

（蒋　香梅 委員）

・　教育という言葉を使うと上下関係が意識されるため、趣旨がずれてしまうということだと思う。

・　国際理解教育ではなく、国際理解活動としてはどうか。

・　参加者の意見で、「本提案を受け入れ可能な県立学校の実態を課題にする必要がない」という部分は、よく意図が分からなかった。

（肖　欣怡 部会長）

・　取組を始めていない段階なのに、課題として敢えて書く必要はないという意見だった。

（蒋　香梅 委員）

・　削除するか。

(韓 昌熹 委員)

- 制度化するタイミングでは、生じる課題について検討しないといけない。提言は政策の一歩手前の話であり、外国籍県民会議は政策につなげるための位置付けであるため、政策ができたときに生じそうな課題については、伝えないといけない。内容がよいかは別として、項目自体は必要でないか。

(肖 欣怡 部会長)

- 課題という言葉が引っ掛かるなら、「注意点」や「こういうことも意識して進める」といった表現に変える方法もある。

(韓 昌熹 委員)

- 「今後の課題」としてはどうか。

(蒋 香梅 委員)

- 私たちが提言する時点では、その段階まで進まない。

(韓 昌熹 委員)

- だからこそ今後の課題として、我々が提言したものを進行していくうえでここを目指した方がよいという意味を込めて書く。

(蒋 香梅 委員)

- それを書く必要があるかどうか。

(韓 昌熹 委員)

- 確かにそれはある。もう少し検討したい。
- 市民提案は内容がぶれやすい傾向がある。いろいろと盛り込みすぎか。

(蒋 香梅 委員)

- 行政側としての意見はどうか。

(事務局)

- 「県立高等学校の実態」というと、詳しく調査しなければいけない印象があるため、「実態」ではなく「把握」などに言い換えるとよいと思う。
- この活動に取り組むモデル的な学校を探し、そこから広げていこうという話で、サプコタ委員が言っていた川崎や、他でも似たような取組をしているという話もあったので、そういった内容も盛り込んだ方がよいと思う。

(韓 昌熹 委員)

・ 「予想される課題」は、「事業を進行するうえで意識すべきこと」という感じに表現を変えればよいのではないか。

(肖 欣怡 部会長)

・ 皆さんの意見を聞きたい。企画概要に「外国人コミュニティや外国籍県民などが活躍できる場づくりにもつながる」と書いてあるが、もっと適切な表現はあるか。このままだと、横のつながりのイメージになってしまう。

(韓 昌熹 委員)

・ 外国人コミュニティや外国籍県民も応援するといった感じの表現に変えてはどうか。

(事務局)

・ 元々は①と②に分かれていたので、整理した方がよい。文を分けておかないと、読む人は一つの文章として読んでしまう。記載された取組内容を通じて場づくりをするという書き方だと、ハードルが高く見えてしまう。

・ 内容はこれで、そこから波及する効果として、場づくりにもつながるといった感じにした方がよいかもしれない。

(蒋 香梅 委員)

・ 背景に「横のつながり」という表現がある。これを消して、下をそのような文章に変えると理解しやすい。

(事務局)

・ 背景の３点目は、「支え合える状況にする必要がある」といった感じで、まとめてしまってもよいと思う。

・ 教育には熱い思いを持っている方も多い。内容のところに日本語教育や母文化教育という記載があるが、言葉の使い方は改めて考えた方がよい。

(肖 欣怡 部会長)

・ 教育というよりは、言葉の理解、コミュニケーションの手段の話である。

(蒋 香梅 委員)

・ タイトルに「クラブ活動」という言葉がある。誰かを呼んできて学ぶというイメージだが、この表現がよいのかどうか。

（肖　欣怡 部会長）

・　プロジェクトという言葉がよいかもしれない。

（韓 昌熹 委員）

・　理解のためにどのような関係性を作るかという話なので、教育ではなく自主活動であるという部分を強調する必要がある。教育委員会としてはそういう余力はないと言われたら、話が進まない。

・　学校でもそういう教育を推進する予定はないと言われるかもしれない。しかし、学生たちが自主的に行う活動であれば、問題ないはずである。

・　国際理解プロジェクトの立ち上げ支援といった表現にすれば、学校主体ではなく、生徒主体の取組だということが分かるかもしれない。

（事務局）

・　資料の中に「自主的」や「生徒が率先」といった言葉を組み込んでいくと、伝わりやすくなると思う。

（韓 昌熹 委員）

・　似た活動を自主的に行っている団体があるか調べて、他の学校でもできるようにするとか、他の学生たちに紹介するといったことも必要だと思う。

・　最近、横浜市市民協働推進センターで活動している学生団体で、不登校の中学生５人くらいが集まり、居場所について考える活動が始まった。

・　また、起立性調節障害の中学生も、同じ障害を持った子が集まる会を立ち上げて活動していたりするため、自主的に行っている可能性もある。

・　最近の高校生はすごい。いろいろな高校から５～６人が集まって、政治について勉強しているグループがある。市議会議員を呼んで施策を紹介してもらうといった活動をしている。

（蒋　香梅 委員）

・　それは提言や提案があって始まったものか。

（韓 昌熹 委員）

・　どういう経緯で始まったかは分からない。Twitter等でお互いを見つけて集まったらしい。時代が違うと感じた。こういう活動もあるかもしれない。

（事務局）

・　そういう生徒を入口にして、もっと活動を広げていくという手もある。

(韓 昌熹 委員)

- こういう活動をしているのは自分の学校で私しかいないと言っていた。ただ、自主的に強い思いを持っている生徒はいるはずである。

(肖 欣怡 部会長)

- 話し合った内容をまとめる。タイトルの「国際理解」という表現は変更しないが、「クラブ」がよいかどうかは、もう少し検討する。
- 「多文化共生社会を目指す」といったサブタイトルを付ける。
- 背景に記載されている「横のつながり」は削除する。
- 企画概要の「教育」という言葉は他の表現を考える。また、つながりではなく、「コミュニケーションを促進する」といった表現にする。
- 補足として、教育ではなく、生徒たちが主体的に活動を行うものであることが伝わりやすくなるように、説明を入れる。
- 「予想される課題」は、「今後の事業を進行する上で意識すべきこと」といったような表現にする。
- 自主的に同じような活動をしている学生がいるかもしれないため、情報を調べて分かったことがあれば、部会内で共有してほしい。
- 韓委員の案をベースに分かりやすいように図を作り、提言の中に入れる。

(韓 昌熹 委員)

- 日本人の知人から、こういう話を聞いた。学生のときよく遊んだ友人が在日韓国人であると大人になって分かり、今考えると、その子はキムチをよく食べていた。何か違う部分があると感じつつ、自分と全く違うという認識はなかった。その人はすごくオープンマインドになっている。
- 学生のときに友だちを区別せずに受け入れるといったことが大事なので、ぜひこういうものが実現できればよいと思う。

(レ ダンコア 委員)

- 多様性に対してオープンに受け取るか、排他的に受け取るのか。自分と違う人々にどう対応するのか、向き合うのか。
- 特に中高生はそういう考え方が発達する時期なので、非常によいタイミングだと思う。
- 今回提言するような活動を通じて、学生自身に体験してもらい、多様性を受け入れる考え方を確立できるようにしてもらいたい。

（韓 昌熹 委員）

・　今後どのように進めるか。次のステップとして、いただいた意見をもとに提言案を修正して、また共有するという感じになるか。

（事務局）

・　有識者から現状の取組等に関する話を聞いて、それを参考に進める手もある。懇話会委員である東海大学の田口先生は、日本語教育が専門だが、外国につながる子どもたちを支援する団体を運営しているため、いろいろな話が聞けると思う。

（蒋　香梅 委員）

・　一度話を伺ってみてもよいかもしれない。

＜社会福祉部会＞

（リディア ワンタ 部会長）

・　オープン会議の意見のうち、提言に入れるべき新しいポイントはあるか。

・　私は、在留資格に関する意見が一番気になる。

・　高齢者は日本にいる期間が長いので、「永住者」が多い。「日本人の配偶者等」で、夫が亡くなっても子どもがいれば、在留資格が変更になる。

（柳　晴実 委員長）

・　在留資格のことをどのように盛り込んでいくかというのは、一つのポイントだと思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　在留資格は国が所管している。県でどうにかできる問題ではないのではないか。

（柳　晴実 委員長）

・　在留資格の問題を直接提言に入れることはできないが、外国人の高齢者がどのようなサービスを受けられるか、日本に居続けることができるかは、在留資格によって影響を受けるという事実がある。

・　本人だけでなく、支援する側にもそういった事実を理解してもらうことは大切だと思う。外国人の高齢者を支えていくとき、在留資格に関する視点が無視できないということは、きちんと押さえておく必要があると思う。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

・　そういう人たちが、早めに一つの場所で、専門性を持った方に相談できる仕組みが必要である。

(柳 晴実 委員長)

・　外国人高齢者が在留資格について詳しく知らないまま、配偶者である日本人が亡くなったとき、本人が望むかどうかに関わらず、「日本人の配偶者等」という在留資格を変えなければいけない状況になる。

・　その人が置かれた状況によって、在留資格が何に変わるかは異なる。新しい在留資格によって、その人が生きていく方向が違ってくる。

(ハリロバ ナタリア 委員)

・　もし「定住者」で配偶者が亡くなったら、「定住者」ではなくなるのか。

(柳 晴実 委員長)

・　定住者は大丈夫である。

(リディア ワンタ 部会長)

・　旦那さんが生きている間は「日本人の配偶者等」の在留資格で、旦那さんが亡くなり、今も永住者になれていない人もいる。

(柳 晴実 委員長)

・　永住者の在留資格を取るためには、年数や自分で生計を維持できるなどの条件が関わってくる。

・　先日出席した研修で、行政の税金担当の人が来ていた。質疑応答で、「税金を払わない外国人に対して、『税金を払わないと在留資格の更新に影響が出る』と、文章に書いて手紙で渡してよいか。」という質問が出た。

・　そういう感覚を持った人がいる。日本人はもし税金を払わなくても、住む権利を奪われることはない。在留資格を持った外国人は、税金を払わないとそこに住み続けられない状況になる。外国人がそういう状況に置かれていることを、きちんと皆が理解したうえで対応することが大切である。

(ハリロバ ナタリア 委員)

・　それは情報提供に関する話なので、情報部会で扱うべきではないか。なぜ社会福祉部会なのか。

（柳　晴実 委員長）

・　事前に情報提供を受ける部分は情報部会の話になると思うが、外国人の高齢者の身に何かが起こったときに、どこに相談したらよいか、どのように対応したらよいか、そういった部分は社会福祉部会の中身になると思う。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　介護が必要になったり、在留資格で問題があって困ったときに年齢的に自分で動けない人も出てくるので、そこをどうサポートしていくかだと思う。

（リディア ワンタ 部会長）

・　入管では在留資格の申請のとき、最近は年金や社会保険などの案内などもしていると思うが、介護保険のことまでは皆に伝わっていないと思う。

（柳　晴実 委員長）

・　どこまで提言の文章に載せるかは検討が必要である。外国人高齢者の相談先となる場所や人が必要であるということは、現場の声としてもあることが確認できたので、必ず残して提言に入れるべきだと思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　すごく難しい問題なので、全てを誰かにまとめてお願いできたら助かる。

（柳　晴実 委員長）

・　それは現実的に難しい。また、必要性が分かっても、具体的にどうすればよいかを私たちだけで考えるのは難しい。

・　提言には、コーディネーター制度が必要なので、制度を作るための取組を行ってくださいと書く。具体的な実現に向けては、県民会議の委員、大学の先生なども入れた検討会議を県に作ってもらう。

・　その中でどういうものをどのように作るか話し合って進める形になれば、現場の声も外国人の声も入れて作っていける形になると思う。

・　例えば、コーディネーターは必ず外国につながりのある人にしてほしいという条件があれば、その点を提言に明記すればよいと思う。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　そういった内容全てを、コーディネーター制度導入の提言の中に入れるのか。

(柳　晴実 委員長)

- そういうことになると思う。
- オープン会議に来ていたＴＫＮＫの方々は、調査して現場の声も聞いているので、具体的にどういうものが必要という声が出ているか、一度話を聞いたうえで、どこまで提言の中に入れるか判断するのも一つの手だと思う。
- 以前、研修で中国人の介護士の話を聞いたとき、ＴＫＮＫの方と同じことを言っていた。厚生労働省のホームページに掲載されている事業所一覧で、中国語で対応可能な施設を調べることができる。中国語のできるスタッフがいて、中国語対応可能と言えば、掲載施設が増えていくと聞いた。
- 地域の介護施設一覧の中に、多言語対応可能といった列があると探しやすくなるという話も出ていた。実際に取り組んでいる人たちがどういうものを求めているのか、聞いてみるのもよいと思う。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

- 私も以前その研修に参加したが、言語の対応者が見つからない。ホームページに載っていても、実際にはなかなかつながらない。

(金 愛蓮 委員)

- 介護職員の異動や退職の頻度も高い。情報がどれくらいの頻度で更新されるかにもよる。ワンストップセンターに問合せして、案内できるとよい。

(柳　晴実 委員長)

- 外国語のできるスタッフがいても、本当にその人が動けているかどうか。アップデートされた情報が集まる場所が必要である。

(金 愛蓮 委員)

- 介護については、人によって状況が異なる。80歳を過ぎて認知症で何も話せないかもしれないし、生きていても何もできない状態かもしれない。施設に入りたい人もいれば、ヘルパーさんに来てもらって家で介護されたい人もいる。在留資格がなくても人権のために何とかすべき問題だと思う。
- 私が介護施設にいたとき、インドネシア人の介護士が入ったら、日本人の高齢者がインドネシアに行ったことがあると、話が盛り上がっていてよいなと思った。彼が亡くなったとき、民族衣装を着せてお見送りをした。
- 別のパターンだが、介護士が外国人で、その人が自分の国の人をケアする確率はとても低いと思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　介護施設に人工知能を導入すべきである。外国人高齢者が音声で話した内容をそのまま通訳する。

（柳 晴実 委員長）

・　それも不可能ではないと思えるような時代になってきた。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　介護現場に、派遣会社が入ってきている。ある施設で３か月働いたら、翌月からは別の施設で働くなど、介護が必要な人たちとのつながりを作ることがだんだん難しくなっている。

（金 愛蓮 委員）

・　派遣会社の役割は、ある意味でコーディネーター制度の提言に似ている。

・　私たちの提言のポイントの一点目は、施設に入った外国人高齢者のためのサービスをどうするか、二点目は介護施設に入るまで健康的に過ごせる期間を延ばすことだと思う。

（リディア ワンタ 部会長）

・　現在、介護の在留資格を持っている人が、どこの事業所で働いているか分かるか。人材の移動が激しいため、コーディネーターが入管からデータをもらって、誰がどこで働いているか教えられるとよい。

（柳 晴実 委員長）

・　入管が把握していると思う。そういった情報があると、活用できる。

（リディア ワンタ 部会長）

・　霧が丘団地ではインドネシア人のコミュニティができているが、インドネシア人の介護士で、霧が丘にある介護施設で働いている人もいる。

・　インドネシア以外でも、ブラジルやロシアなど介護の資格で入国している方もいると思うので、そういった方の情報をつなげられるとよい。

（柳 晴実 委員長）

・　介護の資格で来た人の把握はできるかもしれないが、在日の方のように、日本に長く住みながら介護している人の情報は把握できないかもしれない。永住者の資格を持っている方が介護士をしているパターンもある。

・　実際に仕組みを作る際、情報をどのように集めてどこが把握しておくか考えるときに、情報を集める先として入管が一つの候補になると思う。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　インドネシア人の方が高齢化しているイメージがあまりない。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　インドネシア人の介護士が日本に住んで、その方々が介護を必要とする状況になったら、インドネシア人の介護士が必要になるのではないか。

（リディア ワンタ 部会長）

・　インドネシアのコミュニティの役員を務めているが、先輩たちは 70歳くらいである。先日イベントで 200人ほど集まったが、約20人は高齢者だった。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　高齢者施設は難しいと思うが、地域包括支援センターなど、実際に困っているところへ見学に行くと分かることもあると思う。

（柳 晴実 委員長）

・　一か所でもよいと思う。行ってみてイメージがつかめるとよい。

（金 愛蓮 委員）

・　国や県で、高齢者を支援する取組をどのように進めているのか全く知らないまま、私たちの話し合いだけで提言案を作ってきた。
・　しかし、県の福祉部局で何をしてきて、どのように考えているのか聞いてみてはどうか。外国人のために取り組んでいることがあるかもしれない。

（柳 晴実 委員長）

・　外国人向けの取組をどれくらいしているかは分からないが、提言を固める前に、ＴＫＮＫや県の福祉部局の人から話を聞いた方がよいかもしれない。
・　会議の中ではできないため、自主的に集まって行くことになると思うが、その方が提言の内容を作るうえではよいと思う。

（金 愛蓮 委員）

・　国の制度がどのようなもので、どう進めていこうとしているかも知りたい。
・　以前、相模原市で施設の相談員を募集していた。面接に行ったとき初めて、高齢・障害者福祉課という課があることを知った。

・　地域ごとに二人がペアになり、月一回のペースで相談員が巡回する際に、介護施設の職員が困りごとを相談できる。
・　システムとしてはよいが、実際には内部告発のようなイメージを持たれてしまって、相談の実績が増えない。

(鈴木 クリスチーナ 委員)
・　東京都では外国人の介護に関わっている方々が、２か月に一回程度集まり会議をしている。どう支えていくのかといった視点も大事である。

(柳 晴実 委員長)
・　施設に行くのが難しければ、その会議を傍聴に行ってもよいと思う。
・　現場の方々が、何に困っているのか一番分かっていると思う。
・　自主学習会のような形になるが、１回か２回集まって、どこまで提言に入れていけばよいか、どういう内容があるのか検討できればと思う。
・　高齢者の集いの場づくりについては、あーすフェスタで試しにやってみるのもありなのではないかと考えたが、どう思うか。

(鈴木 クリスチーナ 委員)
・　よいと思う。

(柳 晴実 委員長)
・　県内の外国人コミュニティ等に呼びかけをして、何歳以上か分からないが、外国人高齢者、高齢者を支援している方々などに集まってもらう。
・　健康体操をしたりゲームをしたりして、日頃思っていることを聞くといったことを考えている。

(ハリロバ ナタリア 委員)
・　東京に、外国人高齢者の多いハイキンググループがある。日本に 20年～30年住んでいる人が多い。
・　別のグループにも３回ほど参加した。いろいろな外国人が集まっているが、スペイン語圏の男性が多く、こちらも高齢者が多い。
・　このグループで日本語でコミュニケーションしようとすると、全く通じない。なぜ日本に30年もいて、日本語が通じないのか。

(鈴木 クリスチーナ 委員)
・　外国人コミュニティの中心的存在だと、日本語が必要ないのではないか。

(ハリロバ ナタリア 委員)

- 自国民同士でさえ喧嘩が多く、同じロシア語でも考え方が違う。年寄りになるともっと頑固になる。果たして成功するのか。何のために作るのか。

(柳 晴実 委員長)

- 最初の発想は、集まる場がないため一回作ってもよいのではないかという理由である。ただ、どのように作るべきかは、よく考えないといけない。

(ハリロバ ナタリア 委員)

- 共通のテーマがあるとよい。ハイキンググループは成功している。

(柳 晴実 委員長)

- 話すというより、皆で集まって何かを体験する、そこに言葉が分かる人を入れて、そこで出てきた意見を吸い上げる。
- いろいろな国の高齢者がこれだけくらしていると分かるだけでも、結構インパクトがあるのではないかと思う。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

- 小澤エリサさんは南米中心に活動しているため、川崎市ふれあい館などを交えて行ってもよいと思う。

(ハリロバ ナタリア 委員)

- ウクライナ避難民の高齢者も多い。その人たちはYOKEなどに通っていたが、仕事をできない年齢であるため、やることがない。
- 近所の人と付き合いがなく、ウクライナのコミュニティの中だけで、人と話す時間が短く、うつ病になったりする。日本社会に必要とされていないだけでなく、どこの社会からも必要とされていないと感じてしまう。

(柳 晴実 委員長)

- 先日川崎に「アリランラプソディ」の映画を見に行ったら、上映終了後にハルモニ（韓国語でおばあさんの意）が一斉に出てきて、タンゴに合わせて歌を歌いだすという演出があった。
- コミュニティを中心に来てもらうなら、例えばそのコミュニティの中で、高齢者による出し物を用意してもらい、発表するだけでもよいと思う。
- それをお互いに見る中で、日頃やっていることの話が聞けて、各グループでは前で話していることを通訳して共有する、それだけでもよいと思う。

（リディア ワンタ 部会長）

- 外国人コミュニティに声をかけることになると思うが、例えばアフリカの方は日本で長く暮らしていてもコミュニティに所属しているわけではなく、なかなか参加しづらいと思う。

（柳 晴実 委員長）

- 民族によって高齢者の数は異なる。コミュニティとして参加するところは来てもらって、例えば支援者が一人二人連れてきて参加してもらうのもよいと思う。何かを発表したりしなくても、それはそれでよいと思う。
- 人数の違いはあると思うが、若い層にとって自分たちの将来がそこにあるわけだから、それを現実として見ることはすごくよいことだと思う。

（リディア ワンタ 部会長）

- 私の知人が旦那さんと二人でくらしていて、突然亡くなってしまった。その人は30年ほど日本に住んでいたが、日本語がほとんど話せなかった。
- 旦那さんが出張で不在にして帰宅したら奥さんが亡くなっていて、事件か事故かということで警察沙汰になった。
- 鎌倉市内に住んでいたが、私たちが知らない間に病気になって、亡くなってしまった。外国人も普段から地域の活動に参加することが大事だと思う。
- 私の場合は子どもがいるため、子ども会の活動に参加したりする。子どもがいない家庭は、地域の活動に参加するきっかけがないかもしれない。

（ハリロバ ナタリア 委員）

- 何かインセンティブがあるとよい。例えばロシア系の人は、無料のワインやチーズなど、高級なものがあれば集まる。

（柳 晴実 委員長）

- お酒は出せないが、お菓子やソフトドリンクなら出すことができると思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

- 料理は面白い。地域ごとに国際フェスティバルが行われるが、例えばウズベキスタン料理やウクライナ料理など、それを目当てに人が集まる。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

- 今はイベントで火を使ってはいけないなど、いろいろな制限がある。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・ 湘南台のお寺の日本語会に通っているが、年１回地域の外国人を集めて忘年会を行っている。皆が自宅で作った料理を持ってきて、並べて出す。

（柳 晴実 委員長）

・ 一度イベントなどのきっかけがないと、やりにくいところがあると思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・ イベントを行ってみて、皆が気に入ったら、例えば月１回の開催にする。

（リディア ワンタ 部会長）

・ 霧が丘団地で、６月に 1,000人くらいが集まるインドネシアのイベントを行うので、見学できると思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・ 宗教は関係なく参加できるのか。

（リディア ワンタ 部会長）

・ 問題ない。日本人の地域の人たちも参加する。

（柳 晴実 委員長）

・ 地域の人や民生委員などをどう巻き込むかについても、考えなければいけない。その辺りも、この話を聞くときにヒントをもらえるとよい。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・ あーすフェスタは、今年はあーすぷらざで行うと聞いた。

（柳 晴実 委員長）

・ そのとおりである。屋台も復活する。皆さんにあーすフェスタの企画委員に入っていただきたい。少なくとも企画は一緒に考えてほしい。

（金 愛蓮 委員）

・ スピーチで自分の意見を言うのは、若者だけで終わることが多いが、逆に高齢者に話してもらうのもよい。高齢者は舞台があっても、いつも見る側になってしまいがちである。

・ 何ができるか募集をかけてみるとか、自分の特技を披露してもらうような感じでも、やりがいがあってよいと思う。

（柳　晴実 委員長）

・　もし本人が現場に来られなくても、本人が話している様子を動画として流すだけでも、十分参加した感じがある。

（リディア ワンタ 部会長）

・　外国人高齢者の集いの場づくりについては、私たちとしてもコミュニティの意見などを把握しておく必要があるか。

（柳　晴実 委員長）

・　それは実際に企画を考えて、どこにどのように声をかけるかを決めて、それぞれ担当を決めて声かけできるとよい。
・　提言の中に集いの場づくりという形で入れるとしたら、あーすフェスタで一回やるとして、その後どうするかということは必要だと思う。
・　例えば、そこで高齢者の団体やコミュニティとのつながりを作って連携を取れるようにしておくとか、何がよいかはもう少し考えなければいけない。
・　単発で一回実施して終わりでは駄目なので、その後をどうつなげるかまで考えて作らないといけないと思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　その場合、背中を押し続けないといけなくなる。外国人高齢者を集めても、私たちは高齢者だから放っておいてほしいと言われる可能性もあると思う。

（柳　晴実 委員長）

・　一人ひとりに聞くとそうかもしれないが、これを作ることになったときに、高齢者のコミュニティがどこにどれくらいあるのかという情報を把握していれば、同じ国のコミュニティや介護施設につなげられるようになると思う。
・　集まってくれた人の情報を把握して、把握した情報はコーディネーター制度の中で管理して共有する。

（金 愛蓮 委員）

・　あーすフェスタで１回やってみればよいと思う。
・　以前、公民館のお祭りで高齢者向けのヨガをやると言ったら、近所の施設の介護士が高齢者を連れてきた。興味がある人はそれなりにいると思う。
・　こういう形で社会参加を促す若者がいれば、高齢者も出てこられる。
・　国際理解や多文化共生で終わっているが、外国人高齢者がいることを

認識してもらって、高齢者が抱える問題を見える化した方がよいと思う。

(ハリロバ ナタリア 委員)

- イベントの名称に「高齢者」を付けると、参加者が嫌がると思う。

(柳 晴実 委員長)

- ネーミングは考えないといけない。自分は高齢者ではないと思ったら、誰も来なくなるかもしれない。いろいろと工夫しないといけない。

(リディア ワンタ 部会長)

- 「自分のための介護」や「旦那のための介護」といったタイトルにすれば集まると思う。

(金 愛蓮 委員)

- 「シニア集まれ」などでもよい。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

- 「健康維持の集い」でもよいと思う。

(事務局)

- 先ほど、福祉部門に関する話があったが、県には高齢福祉課という課がある。かながわ国際交流財団の補助事業として実施している高齢者介護施設向けのやさしい日本語講座で、高齢福祉課が周知に協力してくれた。
- イベントを実施する際のお知らせは、お願いすればやってくれると思う。

(柳 晴実 委員長)

- 例えば県民会議の場に高齢福祉課の担当者に来てもらって、県の高齢福祉に関する取組について説明してもらうことは難しいか。

(事務局)

- 分からない。趣旨を説明して承諾してもらえれば、できるかもしれない。
- また、一般社団法人高齢者福祉施設協議会という団体がある。活動内容を見ると、外国人人材の確保や外国人の職場定着支援についての項目があり、県からも事業を受託しているので、外国人関連の取組内容があると思う。

(金 愛蓮 委員)

- 私たちの方から高齢福祉課などを訪ねてインタビューすることは可能か。

（事務局）

・　まずは話を伝えてみて、先方が可能ということであればできると思う。

（金 愛蓮 委員）

・　国や県でどのような仕組みがあって、どういう形で進めているか、今後何をしたいか聞いてみるのもよいと思う。

（柳 晴実 委員長）

・　まず県の動きを把握して、現場の状況も聞いたうえで、どういうところが足りないからこれを進めたい、という感じで考えを深められるとよい。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　一番情報を持っているのはＴＫＮＫなので、そこはとても大事だと思う。

（柳 晴実 委員長）

・　オープン会議で主婦の視点という意見が出たのも気になっている。これは外国人のお母さんの視点ということだと思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　藤沢市のハローワークには、外国人向けのコーナーがあって便利である。

（柳 晴実 委員長）

・　横浜市内にもある。

・　オープン会議で出た意見は外国人高齢者の支援に関する部分がメインであったため、本日は主にそれについて話したが、他の二つの提言については話せなかったので、改めて話し合いたい。

4　全体会議

・　部会別協議の内容について、各部会長から報告した。

（柳 晴実 委員長）

・　もう少し時間はあるが、会議の回数は残り５回である。提言を形にして、12月に発表するところまでもっていかないといけないので、各個人でも考えていただき、各部会でも部会長を中心に話し合いを進めていただきたい。

・　あーすフェスタのことでお話ししたい。組織としては実行委員会があって、その下に企画委員会がある。県民会議は、実行委員会に入っている。

・　企画の中身は、企画委員会で検討している。社会福祉部会では、外国人高齢者を一度集めてみる企画を考えている。
・　委員長は白聖嬰さん、副委員長は中村ノーマンさんに決まった。部会はワークショップ部会、フォーラム部会、ステージ部会、広報部会の四つある。県民会議として企画を出す場合、フォーラム部会に入ることになる。
・　今年は、11月30日（土曜）と 12月１日（日曜）の二日間行う。二日間のどこかの枠で、県民会議の企画ができるとよい。
・　企画の中身は社会福祉部会で考えるが、皆さんにも意見をもらいながら、県民会議の企画として出していけたらよいと思う。
・　イメージとしては、県内に住んでいる外国人高齢者を集めて、何か楽しいイベントにしたい。例えば外国人コミュニティで出し物を検討してもらって披露する、一言ずつ話してもらうなど、いろいろな形があると思うので、その企画を今から考える段階である。
・　企画委員会のメンバーを募集中なので、社会福祉部会としても頑張るが、一緒に企画委員を務めていただけるとありがたい。

（蒋　香梅 委員）
・　イメージが湧きにくい。企画委員としてどういう仕事をするのか。

（柳　晴実 委員長）
・　企画委員は、いずれか一つの部会に入って、自分が持ち込んだ企画を部会のメンバーと話しながら形を作り、声かけをして人を集めて、その企画をあーすフェスタ当日に実施するまで、運営側も含めて全て自分たちで行う。
・　最近、日本人で参加する方はすごく多い。今年も大学生がたくさん来たり、新しい方々が集まってきて、いろいろな方が企画委員に入ってくれている。
・　ただ、外国につながりのある方の参加が少ない。いろいろな理由があると思うが、企画を一緒に作りながら、いろいろな人とつながるというところも、皆さんに体験してほしいと思っている。
・　企画委員会は月１回で、平日夜の 19時から 20時半に行っているが、全て出席しないといけないわけではない。可能な範囲で出てもらって、企画を考えるときには皆さんの意見を入れて、県民会議の企画として出せたらよいと思っている。御検討のほど、よろしくお願いしたい。

（以上）